自選　荷風百句

永井荷風

青空文庫

自選　荷風百句序

わが発句の口吟、もとより集にあむべき心とてもなかりしかば、書きもとどめず、年とともに大方は忘れはてしに、おりおり人の訪来りて、わがいなむをも聴かず、短冊色帋なんど請わるるものから、是非もなく旧句をおもい出して責ふさぐことも、やがて度重るにつれ、過ぎにし年月、下町のかなたこなたに侘住いして、朝夕の湯帰りに見てすぎし町のさま、又は女どもと打つどいて三味線引きならいたる夜々のたのしみも、亦おのずから思返されて、かえらぬわかき日のなつかしさに堪えもやらねば、今はさすがに棄てがたき心地せらるるものを択みて、老の寐覚のつれづれをなぐさむるよすがとはなしつ。

昭和丑のとし夏五月

荷風散人

春之部

墨も濃くまづ元日の日記かな

正月や宵寐の町を風のこゑ

暫の顔にも似たりかざり海老

羽子板や裏絵さびしき夜の梅

子を持たぬ身のつれ〴〵や松の内

九段坂上の茶屋にて
初東風や富士見る町の茶屋つゞき

まだ咲かぬ梅をながめて一人かな

清元なにがしに贈る
青竹のしのび返や春の雪

市川左団次丈煙草入の筒に
春の船名所ゆびさすきせる哉

自画像
永き日やつばたれ下る古帽子

浅草画賛
永き日や鳩も見てゐる居合抜

柳鳴画賛
春寒や船からあがる女づれ

葡萄酒の色にさきけりさくら艸

紅梅に雪のふる日や茶のけいこ

出そびれて家にゐる日やさし柳

銀座裏の或酒亭にて二句
よけて入る雨の柳や切戸口

傘さゝぬ人のゆきゝや春の雨

妓楼の行燈に
しのび音も泥の中なる田螺哉

室咲の西洋花や春寒し

日のあたる窓の障子や福寿草

うぐひすや障子にうつる水の紋

色町や真昼しづかに猫の恋

画賛

門の灯や昼もそのまゝ糸柳

石垣にはこべの花や橋普請

送別二句

笈を負ふうしろ姿や花のくも

行先はさぞや門出の初ざくら

鼬鳴く庭の小雨や暮の春

行春やゆるむ鼻緒の日和下駄

春惜しむ風の一日や船の上

夏之部

夕風や吹くともなしに竹の秋

よし切や葛飾ひろき北みなみ

待つ人の来ざりしかば

水※さへ待てどたゝかぬ夜なりけり

築地閑居

夕河岸の鰺売る声や雨あがり

御家人の傘張る門や桐の花

明やすき夜や土蔵の白き壁

青梅の屋根打つ音や五月寒

八文字ふむや金魚のおよぎぶり

荷船にもなびく幟や小網河岸

四月十八日

物干に富士やをがまむ北斎忌

芍薬やつくゑの上の紅楼夢

卯の花や小橋を前のくゞり門

百合の香や人待つ門の薄月夜

蝙蝠やひるも燈ともす楽屋口

石菖や窓から見える柳ばし

一ツ目の橋や墨絵のほとゝぎす

向嶋水神の茶屋にて

葉ざくらや人に知られぬ昼あそび

散りて後悟るすがたや芥子の花

わが儘にのびて花さく薊かな

あぢさゐや瀧夜叉姫が花かざし

拝領の一軸古りし牡丹哉

涼しさや庭のあかりは鄰から

枝刈りて柳すゞしき月夜哉

涼風を腹一ぱいの仁王かな

鞘ながら筆もかびけりさつき雨

五月雨の或夜は秋のこゝろ哉

住みあきし我家ながらも青簾

蚊ばしらを見てゐる中に月夜哉

藪越しに動く白帆や雲の峯

中洲眺望

深川や低き家並のさつき空

みち潮や風も南のさつき川

妓の持ちし扇に

気に入らぬ髪結直すあつさ哉

秋近き夜ふけの風や屋根の草

秋之部

蘭の葉のとがりし先や初嵐

稲妻や世をすねて住む竹の奥

女の絵姿に
半襟も鳶のもみぢや窓の秋

四谷怪談画賛四句
初汐や寄る藻の中に人の骨
樒売る小家の窓や秋の風
人のもの質に置きけり暮の秋
川風も秋となりけり釣の糸
象も耳立てゝ聞くかや秋の風
鯊つりの見返る空や本願寺
庭下駄の重きあゆみや露の萩
かくれ住む門に目立つや葉※頭
浅草や夜長の町の古着店
糸屑にまじる柳の一葉かな

病中の吟

粉薬やあふむく口に秋の風
降り足らぬ残暑の雨や屋根の塵
秋の雲雨ならむとして海の上
引汐や蘆間にうごく秋の雲
物足るや葡萄無花果倉ずまひ
芝口の茶屋金兵衛にて三句
盛塩の露にとけ行く夜ごろかな
柚の香や秋もふけ行く夜の膳
秋風や鮎焼く塩のこげ加減
小波大人追悼
極楽に行く人送る花野かな

妓の写真に
吉日をえらむ弘めや菊日和
行秋や雨にもならで暮るゝ空

秋雨や夕餉の箸の手くらがり

雨やんで庭しづかなり秋の蝶

昼月や木ずゑに残る柿一ツ

冬之部

初霜や物干竿の節の上

降りやみし時雨のあとや八ツ手の葉

釣干菜それ者と見ゆる人の果

箱庭も浮世におなじ木の葉かな

古足袋の四十もむかし古机

代地河岸の閑居二句

北向の庭にさす日や敷松葉

垣越しの一中節や冬の雨

よみさしの小本ふせたる炬燵哉

小机に墨摺る音や夜半の冬

冬空や麻布の坂の上りおり

門を出て行先まどふ雪見かな

雪になる小降りの雨や暮の鐘

湯帰りや燈ともしころの雪もよひ

窓の燈やわが家うれしき夜の雪

寒き夜や物読みなるゝ膝の上

冬ざれや雨にぬれたる枯葉竹

襟まきやしのぶ浮世の裏通

落る葉は残らず落ちて昼の月

落残る赤き木の実や霜柱

荒庭や桐の実つゝく寒雀

昼間から錠さす門の落葉哉

冬空や風に吹かれて沈む月

寒月(かんげつ)やいよ〳〵冴(さ)えて風の声

小松川漫歩三句

あちこちに分(わか)るゝ水や村千鳥(むらちどり)

寒き日や川に落込(おちこ)む川の水

大根(だいこ)干す茅(かや)の軒端(のきば)や舟大工(ふなだいく)

下駄買(か)うて箪笥(たんす)の上や年の暮

麻布閑居

座布団(ざぶとん)も綿(わた)ばかりなる師走(しはす)哉

行年(ゆくとし)や鄰(となり)うらやむ人の声

青空文庫情報

底本：「麻布襍記　――附・自選荷風百句」中公文庫、中央公論新社
　2018（平成30）年7月25日初版発行
底本の親本：「荷風全集　第十四巻」中央公論社
　1950（昭和25）年10月25日発行
初出：「おもかげ」岩波書店
　1938（昭和13）年7月10日
※「灯《ひ》」と「燈《ひ》」の混在は、底本通りです。底本の親本、「おもかげ」岩波書店1938年7月10日第1刷発行、「おもかげ」岩波書店1938年7月30日第2刷発行、「荷風句集」細川書店1948年2月25日刊行では、「灯」に統一されています。
※表題は底本では、「［＃割り注］自選［＃割り注終わり］　荷風百句」となっています。
※ルビの誤植を疑った箇所を、「荷風全集　第二十巻」岩波書店、1985（昭和60）年4月5日発行の表記にそって、あらためました。（底本の「編集付記」に「難読と思われる語には岩波書店版『荷風全集』等を参照し、新たにルビを付した」とあるので）
入力：kompass
校正：砂場清隆
2020年3月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

自選　荷風百句

永井荷風

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/